都留市史

資料編　地史・考古

其の二

第５号住居址（第11図―62～78）

本住居址からは、須恵器坏、壺、土師器皿Ｂ１類、坏Ａ１・Ｃ２・Ｄ・Ｅ２類、甕などが出土した。

62の須恵器坏は器高が深く、高台が付くものと思われ、色調は暗青灰色を呈し、白色砂粒が特徴的に混入している。65の底部外面中央には、糸切り痕がわずかに残された後にヘラケズリを施し、内面には放射状の暗文が加えられている。67の形態はやや異質で、坏Ｆ１類に似るものと思われる。口縁部の外面は黒色かかっている。68は「堀之内原 type」の坏で、口縁部・底部を欠損している。

72の外面は風化しており調整痕が不明で、内面はナデ調整しており、底部外面は黒色を呈する。74・76の外面はヘラケズリ調整で、77の外面のハケ目は上方（粗）と下方（密）で異種の工具を使用し、内面は上方と同一工具によって調整されている。78は肩部に突帯を有するもので、長野県松本市下神遺跡ＳＫＫＳ第14号住居址出土の「四耳壺」（註６）や北佐久郡北御牧村八重原窯址出土の「四耳壺」（註７）にも同様の突帯が見られる。

第６号住居址（第12図―79～102）

本住居址からは、灰釉陶器埦、土師器皿Ｂ１類、坏Ｅ・Ｆ２類、甕Ｂ類、堝が出土している。

79は遺存部の内面全面に施釉されている。本住居址出土の土師器皿・坏の多くには墨書が認められほとんどが『長』の文字で、体外面に器体を伏せた状態で書かれている。89・90の坏Ｆ２類は内面に縦・横のミガキ（暗文）が施されたもので、縦位（放射状）の暗文は数本の集合が１単位となり、通常４単位で対象的に施されている。85の体下部外面にはハケ状工具による擦痕が認められる。87はやや異質で、器高の浅いものと思われる。93は土師器の高台部のみで、195の形態に近い内面を黒色処理する坏に付されるものと思われる。接合面には糸切り痕が認められ、本来接合していた坏底部のネガティブであろう。100はロクロ整形で、蓋としては口径も大きく、立ち上がりも急であるが、口縁部端部のかえりや内面の回転を利用したナデの状況などから蓋と判断した。83・96・99・102はかまど内から出土している。

第７号住居址（第13～15図―103～159）

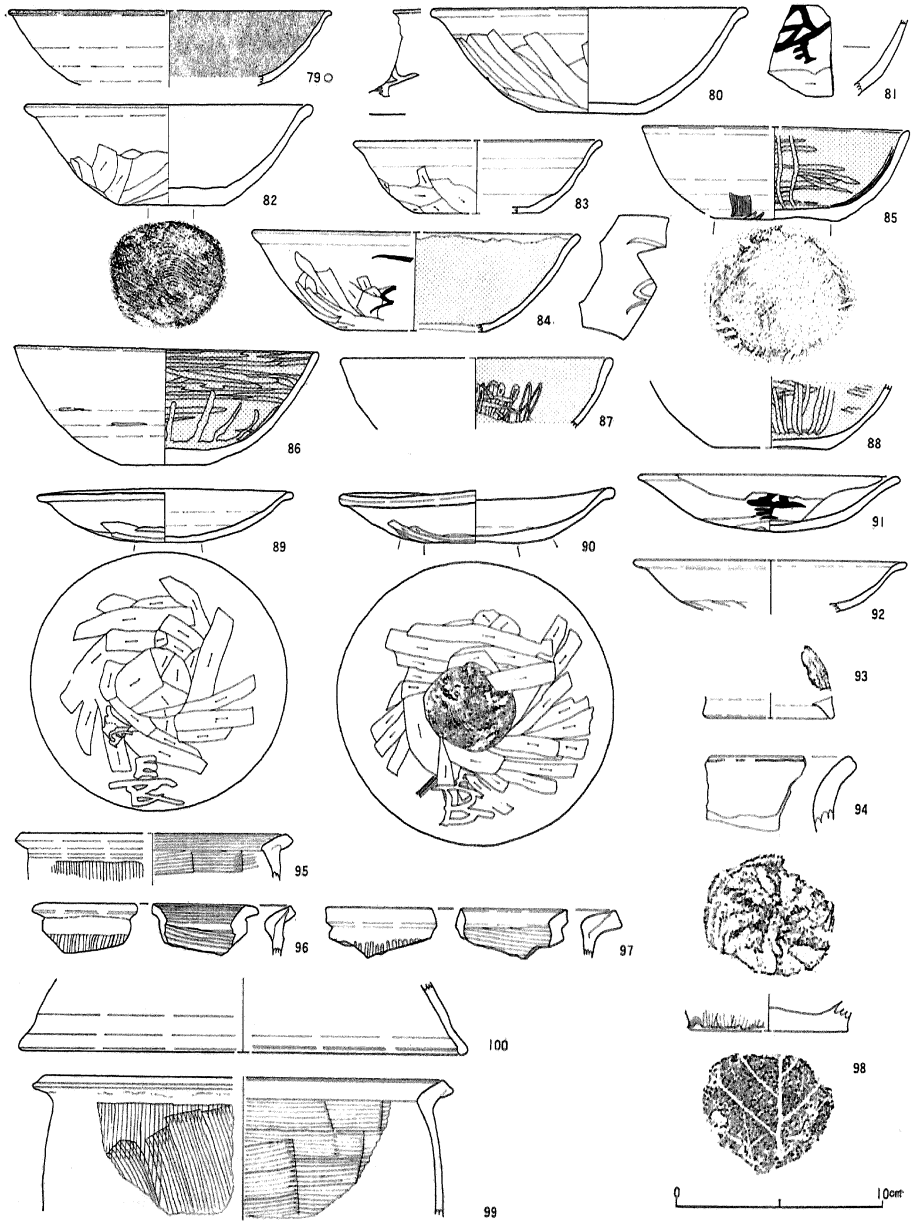
本住居址からは、須恵器蓋、無台坏、長頸壺、灰釉陶器埦、土師器皿Ａ・Ｂ類、坏Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｅ・Ｆ３類、甕Ｂ・Ｄ類、堝などが出土している。

須恵器坏は底部中央に回転糸切り痕を残して周囲をヘラケズリするものや、全面に糸切り痕を残すもの、体下部外面に横位のヘラケズリを加えるものが認められる。

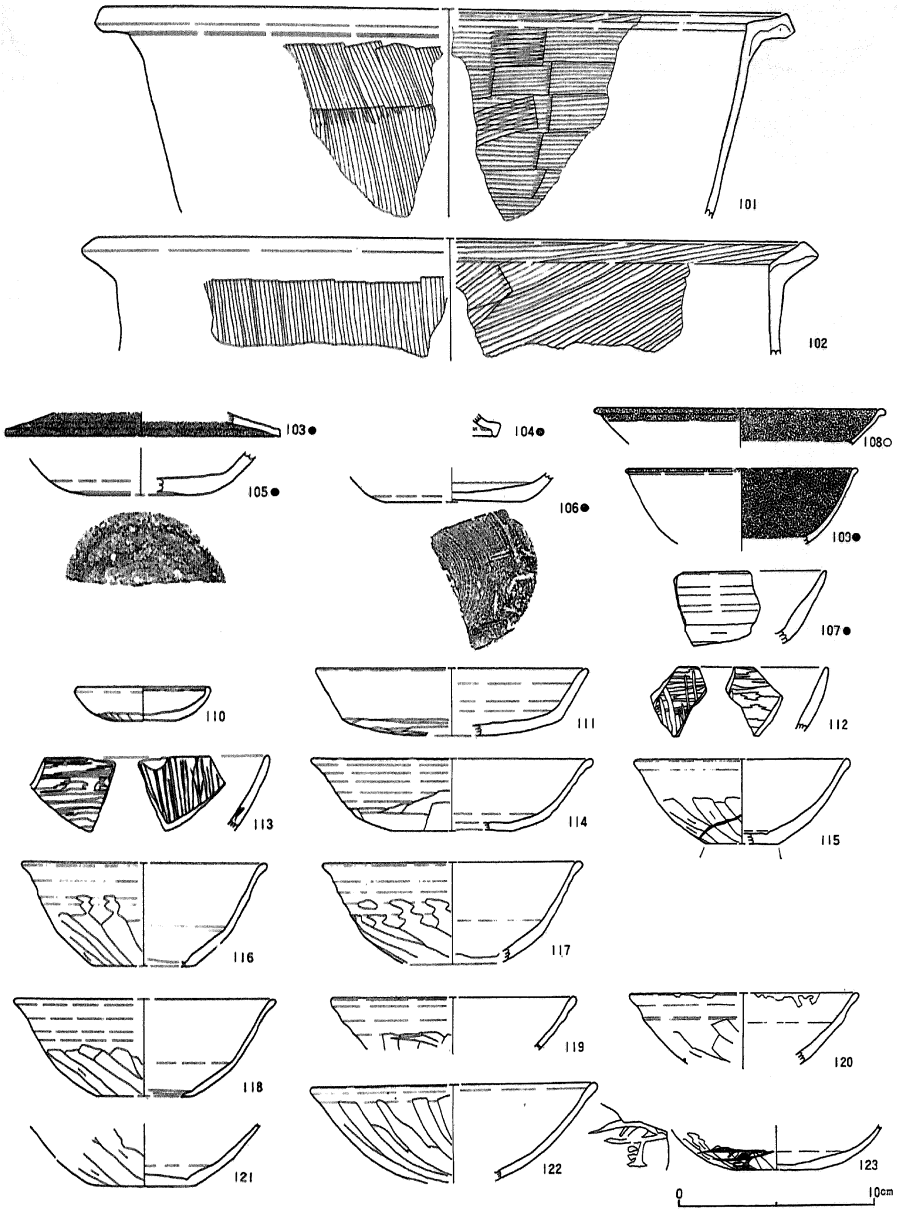
灰釉陶器埦は小破片で、内面のみに施釉されたものと口縁部外面におよぶものとがある。

110はかまど内出土で本地域では類例が見当たらないもので、表面が風化しているため細かい調整やロクロ整形かどうかも明確ではないが、胎土は土師器坏Ｅ類に似ている。128は底部に回転糸切り痕を残すもので、胎土・色調ともＥ類と同様である。134は削り出し高台で、体下部外面を回転ヘラケズリ調整している。138は外面に『長』、内面に『黒』の墨書が認められる。151の須恵器長頸壺は第１号住居址出土の破片と接合する。155～157はかまど内から出土したものである。

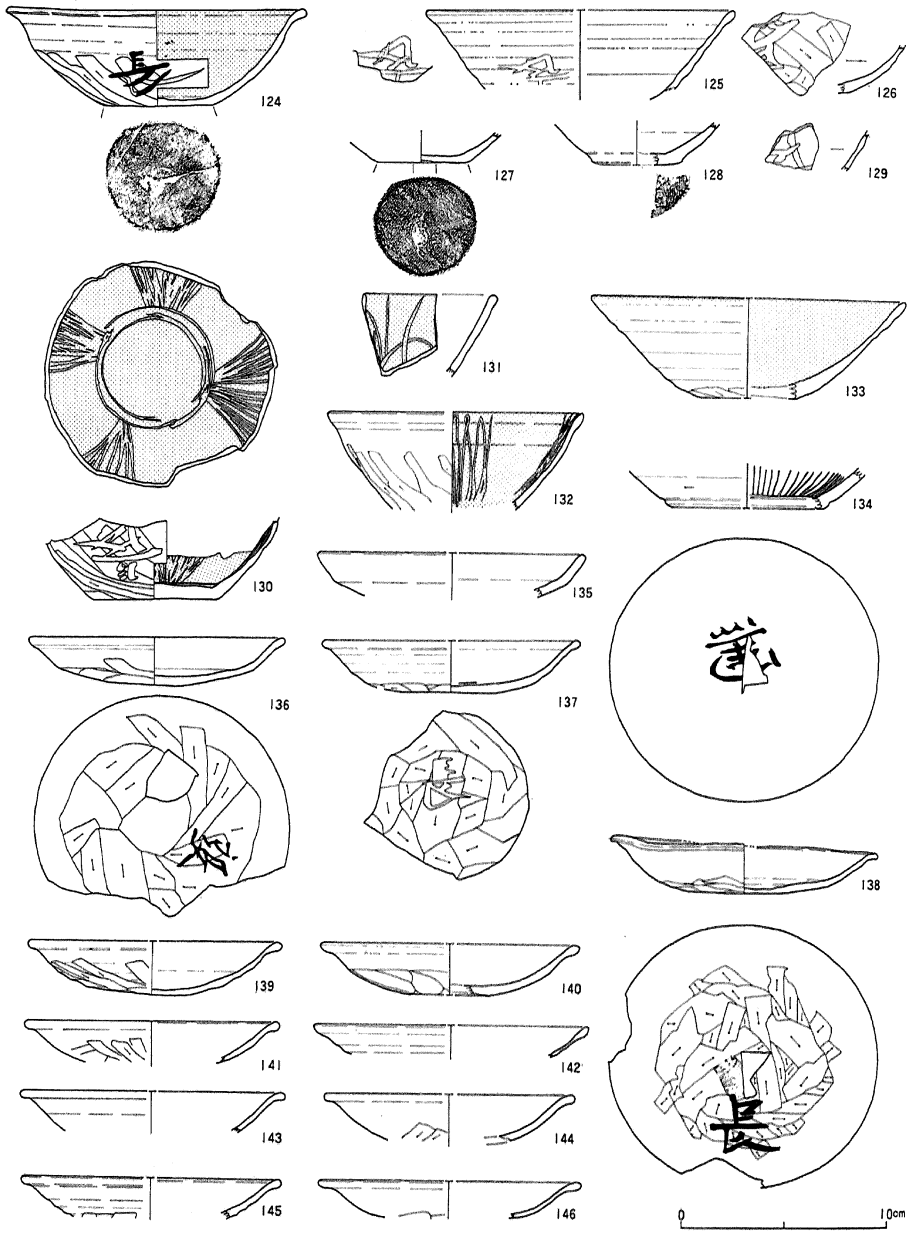
本住居址出土土器群にも時間を異にする２種の土器群が認められ、古い段階の土器群としては105・109・111～113・133・148・153などで、新しいものとしては108・109・115～113・135～143・156～159などである。



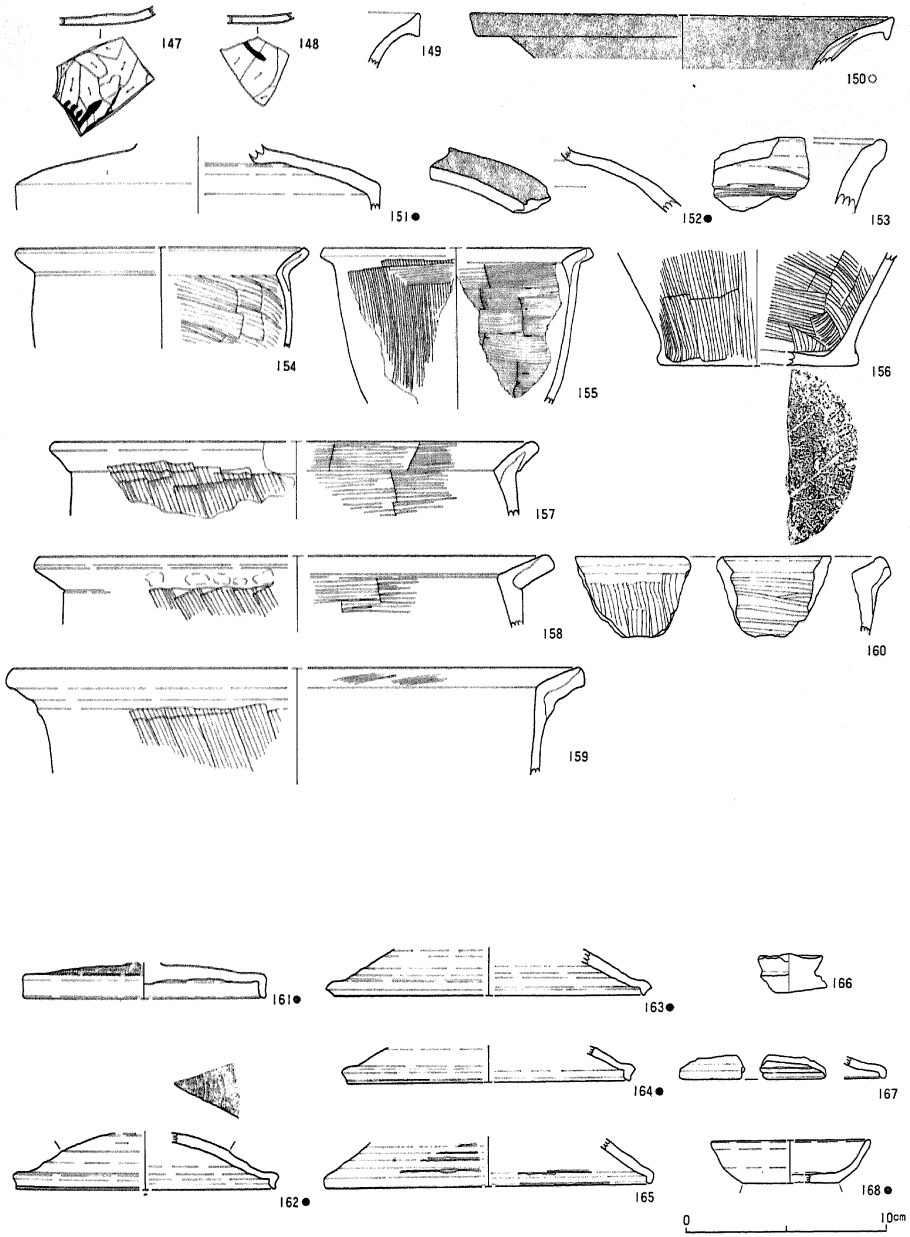
第12図　第６号住居址出土遺物



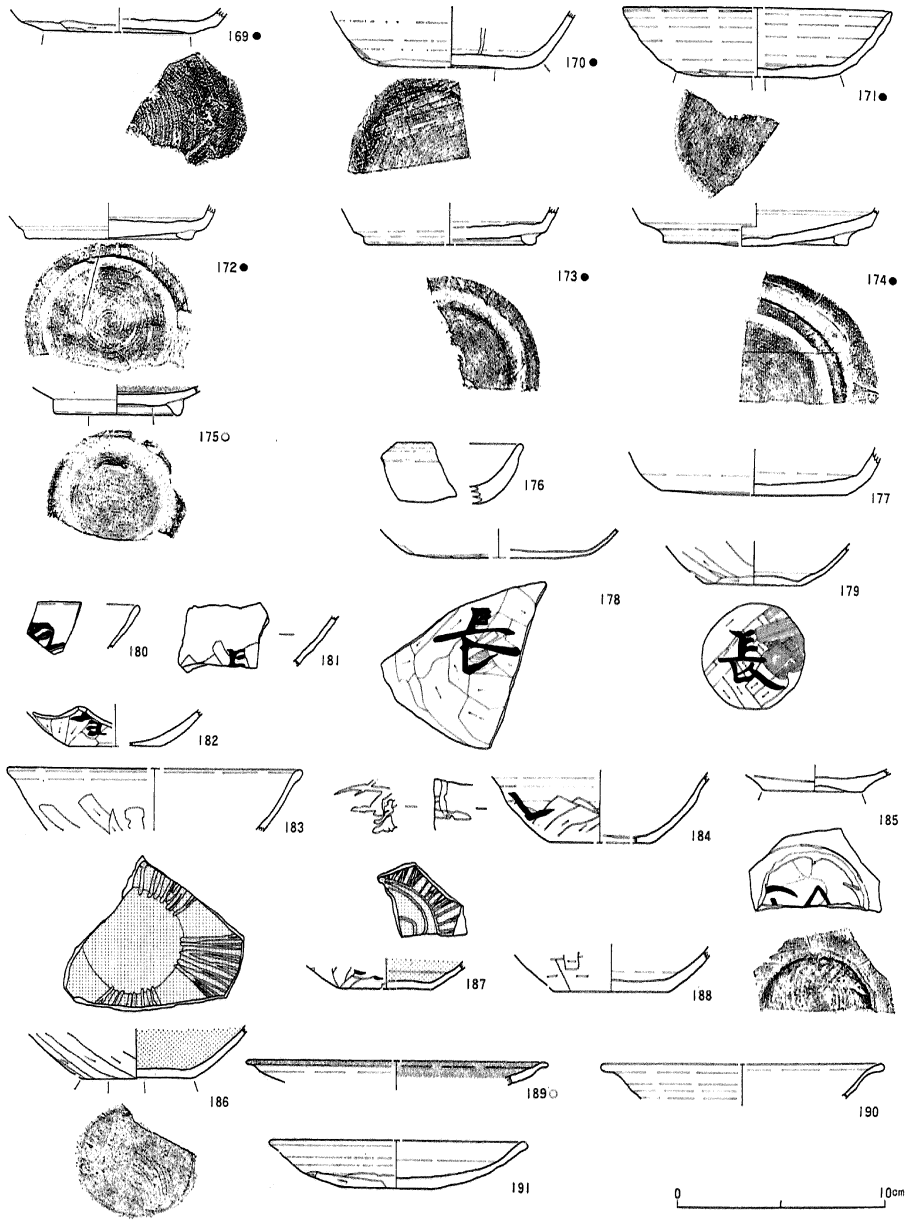
第13図　第６・７号住居址出土遺物〔100～102第６号住、 103～123第７号住(1)〕



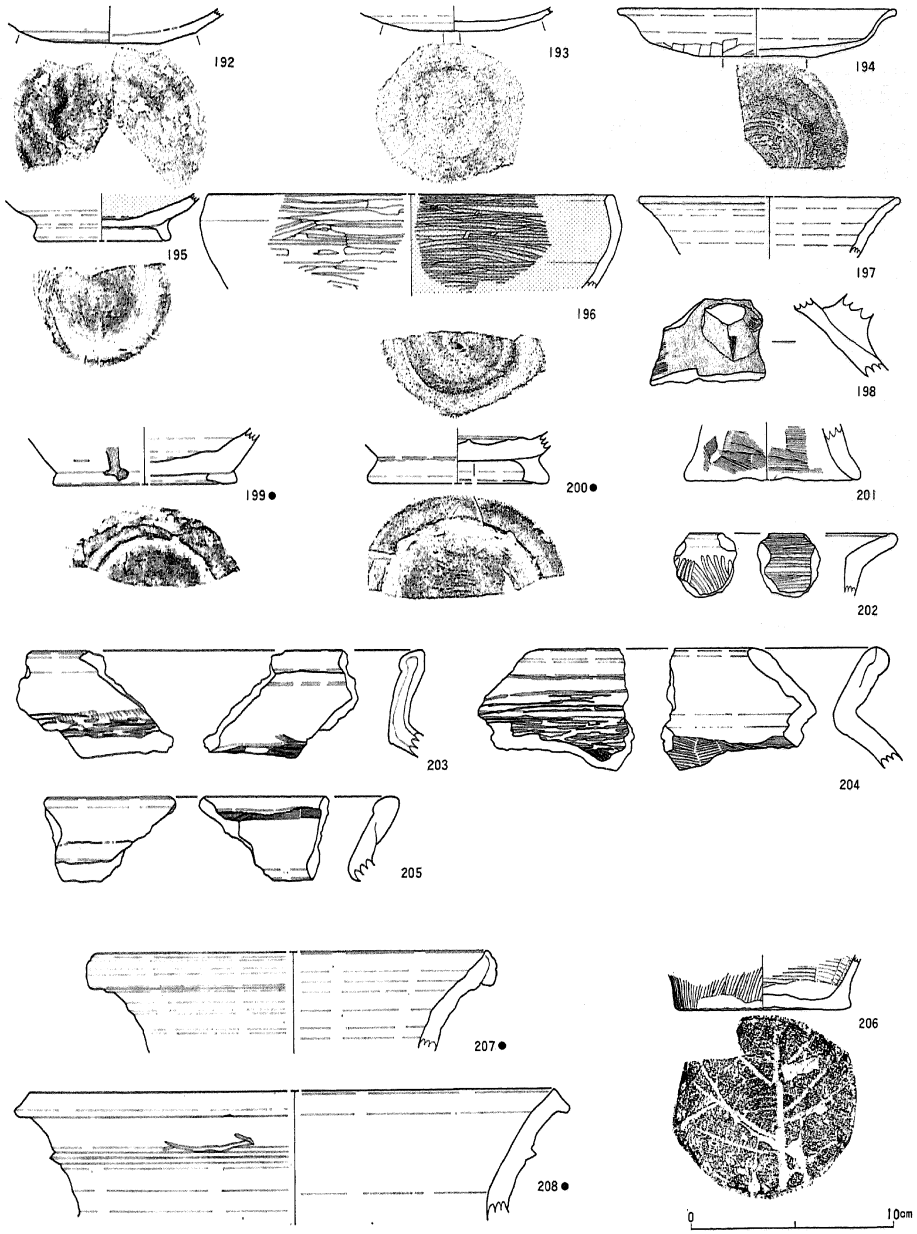
第14図　第７号住居址出土遺物(2)



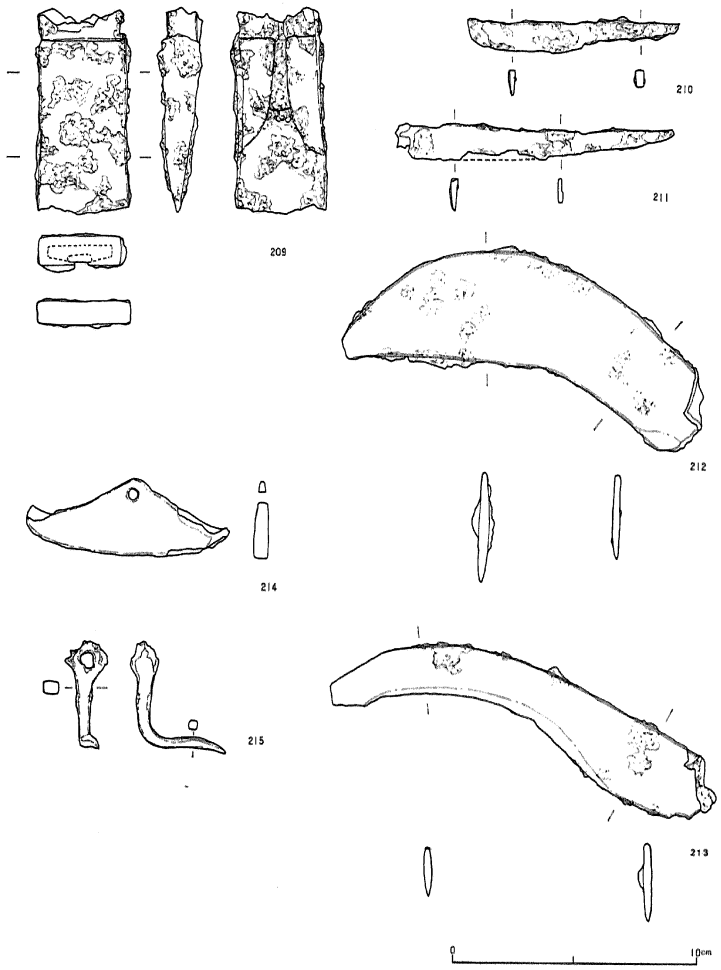
第15図　第７号住居址出土遺物(3)(147～159)・遺構外出土遺物(1)(161～168)



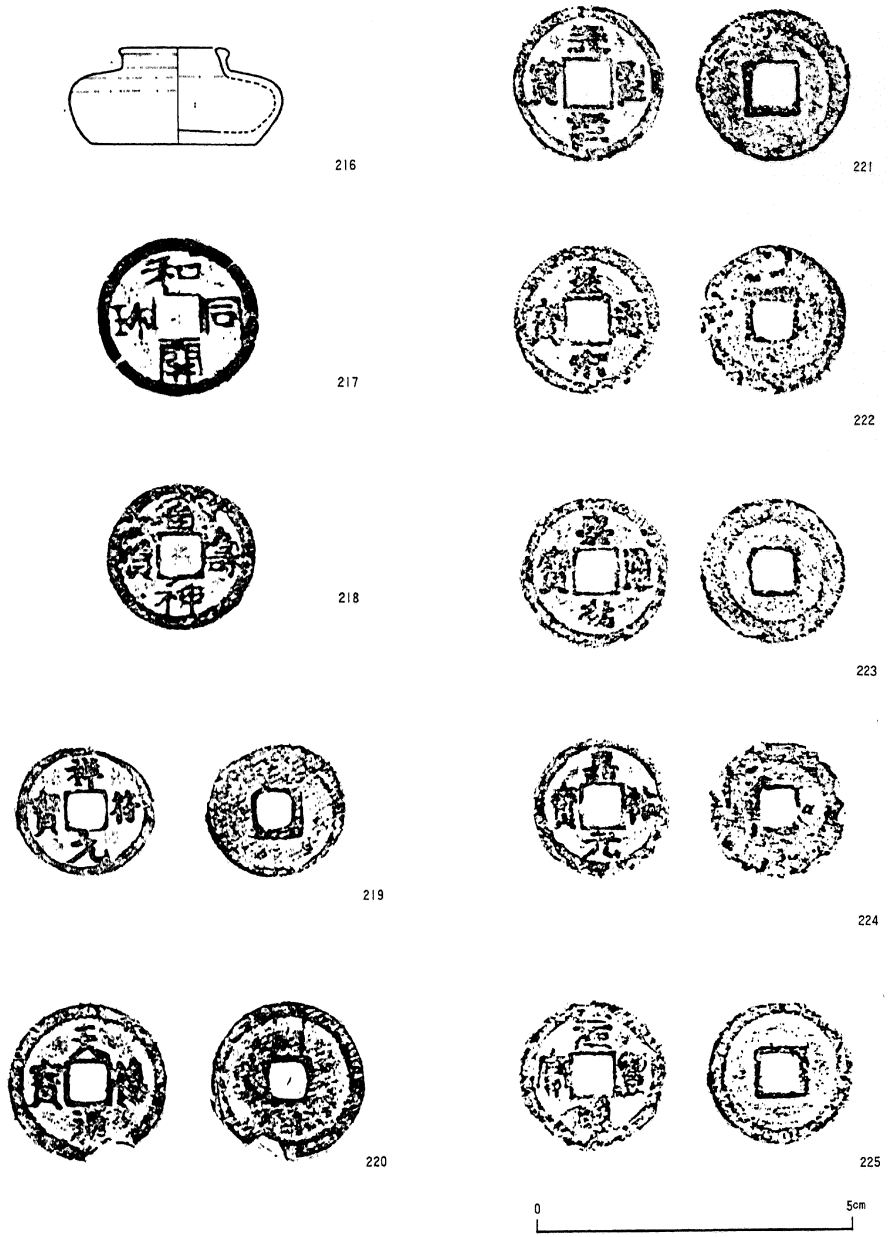
第16図　遺構外出土遺物(2)



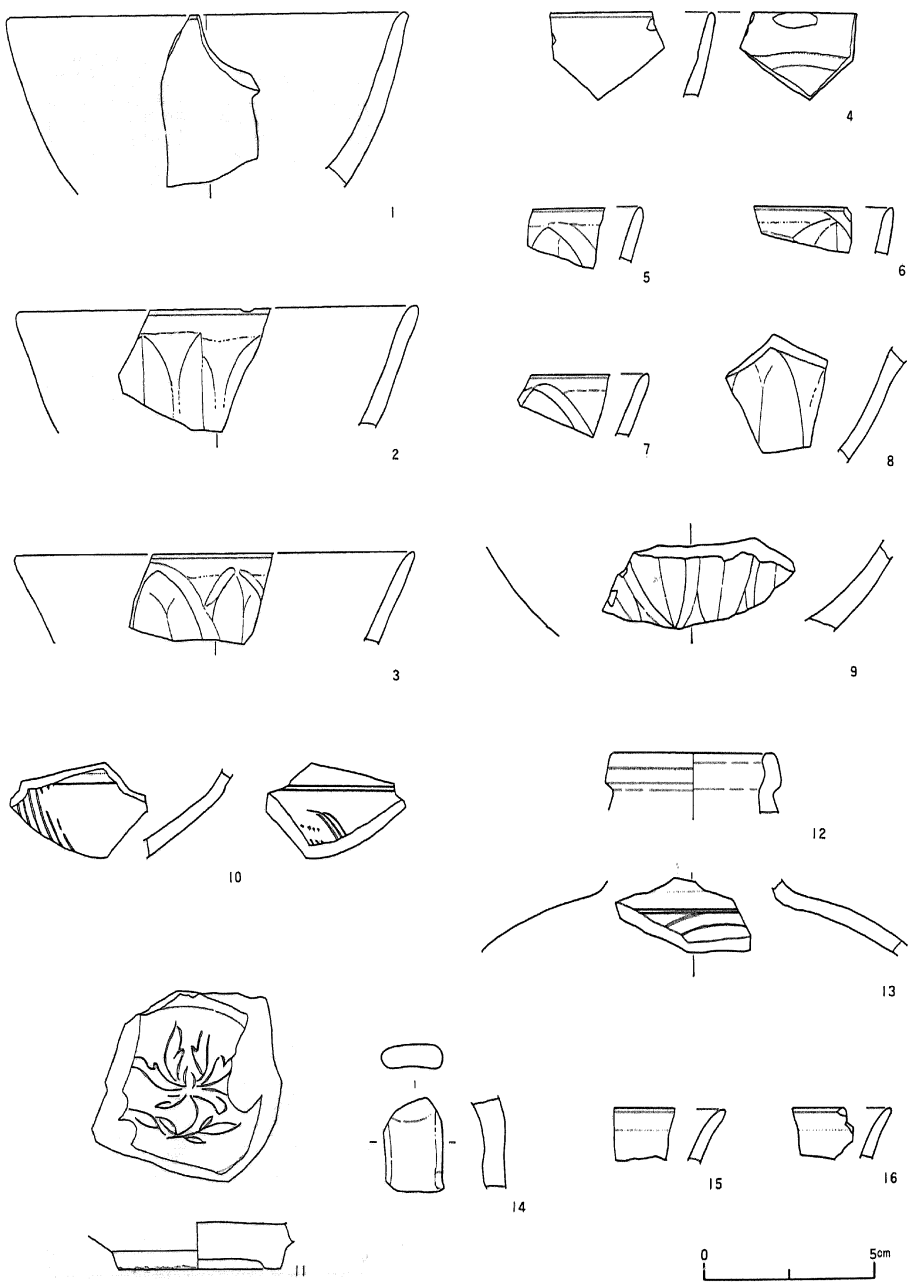
第17図　遺構外出土遺物(3)



第18図　三ノ側遺跡出土鉄製品



第19図　三ノ側遺跡出土の銭貨・水瓶



第20図　三ノ側遺跡出土の中世陶磁器

また、本住居址からは、鉄製刀子（210・211）、鉄製鎌（212・213）が出土している。

遺構外出土遺物

遺構外からも注目すべき遺物が出土している。161は薬壺の蓋と思われ、灰白色の色調を呈し、天井部には緑色の釉が厚く付着している。165～167はロクロ整形の土師器蓋で、165・167には横位のミガキが施され、いずれも赤褐色粒子を含んでいる。168は非常に小型の坏で、底外面をヘラケズリ調整している。灰白色を呈し、胎土には黒色粒子を含むもので、161と同様東海地方で製作されたものと考えられる。176は形態的にやや「堀之内原 type」に類似し、表面は滑らかである。184は体外面に同一文字『長』を2箇所に墨書したもので、両者を比較すると文字の大きさや第一画、第二画の延ばし方や始点が全く異なる様に見受けられる。179の底部外面にはヘラケズリの痕跡の他に、木口の圧痕状のものや、ハス状工具（木口あるいはまさめ）による調整痕が認められる。195は内面黒色処理された高台付坏で、赤褐色を呈する。

196は内外面に丁寧な横位のミガキが施され、内面を黒色処理されたもので、口縁部が特徴的である。201は土師器台付き甕の脚部と思われるが、胎土・色調共に土師器坏A1類、甕A類の「堀之内原 type」の土器に酷似しており、非常に歪んでいる。203～205は土師器甕D1類の駿東型の胴張甕で、内外面で異なったハケ目を使用している。208は口縁部に一条の突帯を有するもので、暗灰色の色調を呈し、やや軟質である。

遺構外からは、10点の金属製品が出土した。214は鉄製で、両端がやや分銅状にかえり、頂部には孔が認められる。215も鉄製で、一端には比較的大きな孔が認められる。216は青銅製と思われ、完形品で遺存状態が非常に良好である。外面には薄く緑青が付着しているが、肩部は光沢を放ち、口縁部に近い部分には金色の付着物が観察される。（註8）

219～225は銅銭で、いずれも北宋銭である。219は初鋳1008年の「祥符元宝」で、周縁を削られている。220は1017年初鋳の「天喜通宝」、221は1023年初鋳の「天聖元宝」で篆書体である。222は1037年初鋳の「皇宋通宝」で真書、223・224は1056年初鋳の「嘉祐通宝」・「嘉祐元宝」でいずれも真書体である。225は1078年初鋳の「元豊通宝」で篆書体である。

また、三ノ側遺跡からは奈良・平安時代の遺物の他に、中世の輸入陶磁器が多く出土しており注目される。

1～9・11は龍泉窯系の青磁碗である。2～9には蓮弁文が施されており、11の見込み部にも蓮華文が線刻されている。4は内面に沈線が認められ、1のみ素文である。

10は同安窯系の青磁で、皿か碗か明確でない。内外面に櫛目文が施されている。

12・13は同安窯系と思われる青白磁瓶である。素地・釉調から見て同一個体の可能性がある。

14も同安窯系と思われる青白磁製のもので、おそらく水注の把手部と思われる。

15・16はいわゆるロハゲの白磁で、口縁端が露胎になっている。

以上の製品は、大略13世紀～14世紀の所産であり、これだけの輸入陶器が纏って出土した例は都留市では皆無で、都留市の中世史を研究する上で特筆される様相を示している。

成果と課題

本遺跡の住居址の営まれた時期についてまず簡単に検討したい。

現在、古代の土器の年代的位置付けは主として須恵器・灰釉陶器に依拠しているが、これは言うまでもなく土師器に比較して須恵器の形態が全国的に斉一性があり、形態的変化も同指向を採ると捉えられ、一部地域での型式学的変遷や絶対年代の判明する資料の伴出という調査の成果などを他地域に波及させることが可能と考えられるからであり、灰釉陶器についても生産地がほぼ限定された地域から広く供給されていたことなどがその理由と思われる。

しかし、巨視的には同様であるが、より微視的に検討した場合、窯址群によって焼成器種や形態・調整など現在の窯式の基準となっている諸要素が異なることも多く、一部地域で四半世紀あるいはそれより短期間の時間幅を須恵器の一型式に与えて研究を進めつつある現在、その細かな相違を無視して他地域の編年をそのまま導入するのは非常に危険であると言えよう。そうした意味で、現在主として開発に伴う窯址群調査の増加とあいまって、各地域の須恵器の編年と他地域との対比が地域に根づいて進められているが、かつての甲斐国のように奈良・平安時代の須恵器窯がほとんど発見されていないところでは、必然的に須恵器を他国より移入するか、土師器等の他の食器でその代用をしなければならない。そうした状況を考慮して、以下土器の年代を検討する。

本遺跡出土の奈良・平安時代の土器群は、大きく2群に分けることができる。すなわち、第1号住居址出土のより古式の土器および第3・5号住居址出土土器を中心とする第1群と、第1号住居址出土のより新式の土器および第6・7号住居址出土土器を中心とする第2群である。

第1群中の須恵器坏は、底外面全面回転ヘラケズリの無台坏と高台内を全面回転ヘラケズリ調整する高台付坏で、遺構外の161～174も同群に含まれるものと思われる。土師器坏はA・B・C2・D類、土師器甕はA・D類が見られる。2は胎土中に黒色粒子を含む東海地域所産のものと思われ、形態的には静岡県湖西町早稲荷川1号窯址（註10）や筒川古窯址出土の器高の深い坏に類似するものと思われる。早稲荷川1号窯址出土の無台坏は、伊場遺跡（註11）、城山遺跡（註12）などで神亀4（727）年を上限として8世紀中葉～後葉の年代観が与えられ、その始源についてはかなり不明確であったが、最近の坂尻遺跡の調査等で8世紀前葉に開始された可能性が強くなってきた。（註13）

62は器高の深い高台付椀で、形態的には長野県土器洞1号窯址出土のものと類似するものと思われるが、同時焼成の逆裁頭円錐形の糸切底を有する無台坏は9世紀代に比定される。土師器坏B類は鬼高様式の系譜を引くものと思われ、中谷遺跡第1号住居址（註14）に見られるごとく8世紀前葉の須恵器と共伴するもので、本遺跡からは出土しなかったが、C類のロクロ整形盤状の坏に雰囲気が似ている。D1類の大型品は、静岡県上横山遺跡などで平城Ⅰ・Ⅱの土師器跡（註15）と共伴し、8世紀前葉の時期が与えられよう。また、土師器甕D類も主として静岡県東部地方（駿豆地方）において7世紀末葉～8世紀前葉の遺跡から出土しているものと同様の特徴を示している。

次に、第2群土器についてみると、灰釉陶器、底部全面に糸切り痕を残す須恵器無台坏、土師器坏E・F・G類、皿B1類、埦、甑などが見られる。灰釉陶器は内面（みこみ外周まで）施釉するもので、底外面高台内は回転ヘラケズリを施すものがほとんどである。

5・79・109はいずれも内面にのみ施釉され、5は体下部にまで回転ヘラケズリがおよんでおり、

K—90号窯式期と思われる。灰釉陶器の年代観にはやや不明瞭な点があるが、9世紀後葉の年代を考えて置きたい。3の糸切底の無台坏は、やや緑色を帯びた胎土を有するもので産地は不明であるが、9世紀代と思われる。土師器がE類のほとんどは内面に暗文を有さず、山梨県奈良・平安時代の土器編年XⅠ期（註16）に相当し、「K—14窯期ないしK—90窯期のもの」が共伴する様である。

以上、土器群の内容から検討した結果、8世紀前葉を中心とする時期と9世紀後葉を中心とする時期にまとまりが見られることが明らかになったが、本遺跡においては土器の他に和銅開珎（初鋳708年）、富寿神宝（初鋳818年）という実年代を探る手掛かりとなるものが出土しているが、残念ながら、両者は覆土上面からの出土で、しかも前述のとおりに第1号住居址出土土器には新（第2群）・古（第1群）のものが混在しており、2枚の銭貨と土器群との関係が明確ではないが、土器群の新・古の年代観と2枚の銭貨の初鋳年を考えた場合、和銅開珎が古期（第1群）の土器群に伴い、富寿神宝が新期（第2群）の土器群に伴っていたと考えるのがより自然かも知れない。そうした場合に、第1号住居址新期の土器群は818年を上限とした時期に比定されるものと思われる。

上記の検討から、本遺跡の住居址の所属時期については、第1群の第1（古）・3・5号住居址は8世紀を中心とする時期、第2群の第1（新）・6・7号住居址は9世紀中葉～後葉の時期を考えたい。また、住居址の主軸相互の位置や第6・7号住居址出土土器に見られる多数の墨書などを考えると、第1・3・5号住居址と第6・7号住居址は、各々同時期に併存した可能性が強い。

また、それらにもかかわらずに、土器の様相が住居址によって若干異なるということも見逃せない。

本遺跡の調査は、限定された範囲内だけのものであったが、同時期に営まれた可能性の強い住居址が検出され、古代都留郡下の多良郷の存在形態を示す好資料と考えられる。また、216の小壺が住居址を営んだ人々の所有物だと考えた場合、相当な実力者を想定しなければならないと思われる。

（甲斐博之）

註1　以下「ロクロ整形」は、ロクロを含めた回転台の遠心力を利用して整形する行為を意味し、「ロクロ水挽き」や「粘土紐巻き上げ技法」による成形に連続した行為で、ヘラケズリなどの調整と区別するため、この場合のみ「整形」という語句を使用する。

註2　糸切痕は大きく回転糸切痕と静止糸切痕と明確に判断できたばあいは「静止糸切痕」と表記し、それ以外は単に「糸切痕」と記すこととする。

註3　以下、単に「ヘラケズリ」とした場合は、回転ヘラケズリに対して静止状態におけるヘラケズリを意味し、いわゆる「手持ちヘラケズリ」をも含むものとする。

註4　奈良泰史　1980　「V、発掘調査のまとめと若干の考察」『堀之内原遺跡発掘調査報告書』都留市埋蔵文化財報告第7集　都留市教育委員会

註5　aは白色砂粒、bは甲斐型坏に含まれる赤褐色粒子、cは黒雲母が風化したいわゆる金雲母、dは東海地域で焼成される須恵器・灰釉陶器に含まれる黒色粒子である。

註6　神沢昌二郎編　1984　『松本市下神・町神遺跡』　松本市教育委員会

註7　坂詰秀一　1982　「八重原窯跡」『長野県史考古資料編　全1巻（2）主要遺跡（北・東信）社団法人長野県史刊行会

註８　楢山林継・吉田恵二両氏から塗金の可能性の示唆を頂いた。

註９　向坂鋼二他　1975　『早稲川古窯跡』

註10　向坂鋼二・山村宏　1965　「14、宿北及び筒川の古窯跡」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　静岡県教育委員会

註11　川江秀孝　1980　「第２章　墨書土器の形態分類」『伊場遺跡遺物編２』　浜松市教育委員会

註12　辰巳均　1981　「第３節　土器・陶器の年代観」『城山遺跡調査報告書』可美村教育委員会

註13　吉岡伸夫他　1982　『一般国道１号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報―坂尻遺跡第２次調査―』　袋井市教育委員会

註14　奈良泰史他　1981『中谷・宮脇遺跡』都留市教育委員会

註15　渡辺康弘他　1983『上横山遺跡』小山町教育委員会

註16　坂本美夫他　1983「Ⅲ、甲斐地域」『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川県考古同人会

遺跡の現状

遺跡の調査地点には、現在スーパーマーケットが建ち、また、周辺にも建物が増えてきている。遺跡の範囲は、バイパスを挟んで南側にも拡がるものと思われる。